

「優しさの裏に潜む無意識の偏見」

伊勢原中学校 二年 垣内 美桜

「私は差別なんてしない」多くの人がそう
思っているだろう。かくいう私も、かつては
そうだった。しかし、小四の時に出会った黒
人のアンドリューとの交流を通じて、私は自
分の中にあった「優しさの裏に潜む無意識の
偏見」と向き合うことになりました。
小学四年生の夏休み明けのホームルームで
のことでした。担任の先生が「今日から新し
いお友達が増えます」と言った瞬間、教室の
空気が一瞬止まったように感じました。ざわ
ざわと話していた声がびたりとやみ、皆の視
線がドアの方へ向けられ、そこに立っていた
のは、私達と肌の色が違う、初めて見る少年
でした。黒くカールした髪、大きな瞳、そし
て少し緊張した面持ちで、その姿に、クラス
の子達は驚いた様子で、ざわつきも静まり返
っていました。誰もがどんな反応をすればい
いのかを探っているような、そんな空気が流

れていて、まるで、教室全体がふいに別の国
になったかのような、不思議な静けさで、彼
が「アンドリューです。よろしくお願いしま
す。」ときこちない言葉で自己紹介をする、
教室にはどこか控えめな拍手が起こり、誰も
がまだ距離感をつかめずに、沈黙が残りまし
た。けれど、その時に彼が見せた小さな笑顔
が、教室の張りつめた空気を少しだけやわら
げました。これが私とアンドリューの出会い
でした。

クラスの皆は戸惑っていて、誰も話しかけ
ようとしませんでした。私も最初は、どうす
ればいいのか分からず、しばらく距離を置いて
て見ているだけでした。しかし、休み時間に
なり、彼が一人でノートに絵を描いている姿
を見かけた時、ふと声をかけてみようという
気持ちたちが湧き、「その絵、何を描いてるの？」
と、少し声を震わせながら声をかけました。
アンドリューは少し驚いた顔を上げ、笑顔を
見せながら、「友達の絵だよ」と答えてくれ

ました。その返事に安心して、私は「上手だね」と続けました。すると彼も次第に緊張がほぐれ、少しずつ会話が弾み始めました。その小さな会話がきっかけで、アンドリューと少しずつ距離を縮めることができました。ア
ンドリューと話すうち、アンドリューはナイジェリア出身で、日本には父の仕事のつごうできたのだといい、英語と日本語を交えて話す彼は、いつも明るく、礼儀正しく、学業にも真剣に取り組んでいて、「とても感じのいい人だな」という程度でした。ただ、アンドリュースと行動するうちにアンドリューが日常の中で、「違う目」で見られていることに、私は徐々に気づき始めました。
ある日、合唱練習中、アンドリューがソロパートを一生懸命練習していたけど、発音の微妙な違いを面白がって真似する子や「なんでもそんなに日本語下手なの？」と笑う子もいました。アンドリューは、その場では笑っていたけど、放課後の帰り道にぼつりと「なん

で、違うっていうだけで、あんなふうに言われるのかな」と呟きました。その言葉に私はうまく答えることができませんでした。アンドリュースは少し間を置いて続けました。「僕ね、目立つことにはなれていくんだ。でも日本では歓迎されていないかもしれないって感じる。ことが沢山あるんだ」それを聞いて「気にしすぎだよ」とはとても言えませんでした。アンドリュースが言いました。「でもね、一番つらいのは、優しさでかてくれた言葉なんだ。前の学校では、自己紹介をするたびに『発音がきれいだね』とか『日本語上手だね』と言われることがあったんだ。確かにそれは、悪意を持った発言ではないけど、それは同時に、『あなたは私達とは違う』と言われている。気がするんだ。私は、その話を聞いて愕然としました。なぜなら私自身もかつて、彼に「日本語上手くなつたね」と声をかけたことがある。親しみからかけたその一言で、彼に「外の人間だ」と感じさせてしまった自分の無

自覚さを深く恥じ、アンドリューの経験から差別とは、必ずしも暴力的な言葉や行動に現れるわけではなく、むしろ善意でおこなった、行動や言葉がじわじわと人を追い詰めていくことがあると知り、私は、「差別をしない人間」でいるだけでなく、「差別に気づける人間」でありたいです。